Bulletin of Toyohashi Sozo Junior College
2002, No. 19, 1–12

論　説

豊橋市公会堂の意匠における
スパニッシュ・コロニアルリバイバルの影響について

伊 藤 晴 康

写真 1：豊橋市公会堂

写真 2：San Antonio Municipal Auditorium

1. はじめに
2. 豊橋市公会堂について
3. San Antonio Municipal Auditorium について
4. 豊橋市公会堂と San Antonio Municipal Auditorium との意匠の比較
5. スパニッシュ・コロニアルリバイバルについて
6. San Antonio Municipal Auditorium と類似する意匠を持つ他の建築について
7. 豊橋市公会堂の設計に対するスパニッシュ・コロニアルリバイバルの影響についての考察
8. まとめ
9. 謝辞

1. はじめに

本稿は，1910～20年代の米国におけるスパニッシュ・コロニアルリバイバルと呼ばれる様式のいくつかの建物と豊橋市公会堂について，その意匠上の類似性を検証し，豊橋市公会堂の意匠の成り立ちについて新たな見方を加えるものである．

豊橋市公会堂の設計者中村與資平についての既往の研究は西澤泰彦氏のもの等がある．[i)]

2. 豊橋市公会堂について

豊橋市公会堂は中村與資平の設計により1931年に竣工した．(写真1) 鉄筋コンクリート造（屋根は鉄骨トラス）3階建て，延床面積約2,900m^{2}である．ドームと鷲の彫刻を戴く二本の塔がエントランスの連続アーチをはさんで配置されるファサードを持つ．豊橋市のシンボル的な建築であり，文化庁の登録有形文化財に登録されている．

以下これまでに出版された豊橋市公会堂についての文献から，その意匠についての解説に関する部分を数点引用する．

山口廣＋日本大学山口研究室『近代建築再見（上巻）』には以下の解説がなされている．「豊橋公会堂の前に立ったとき，正月に訪ねた野田市の興風会館を思い浮かべた．ここでもその姿にロマネスク様式への好みをすぐに読み取れたからである．軒先をめぐる出し矢狭間風の装飾がまず目に入る．正面入口列柱上の半円アーチ，三階の二連アーチ窓も，ロマネスク様式の素朴さを活かしてのデザインと思える．そして，正面左右に塔を立て半円ドームを載せ，全体を単純な量塊の組合せでまとめているのもロマネスクか，いやこれは近代建築かと思いまどう．[ii)]」

東海近代建築遺産研究会編著『近代を歩く』には，以下の解説がある「その意匠は，壁面頂部の小アーチの連なるロンバルジアバンドや半円アーチのついた窓などからロマネスク様式の建物と呼ばれている．一方，細部に目を向けると，様々な意匠が随所に見受けられる．階段室塔屋の，垂直にそびえる壁の中央に半球ドームを戴く構成は，当時流行したセセッションの影響が感じられる．また，半球ドームにモザイクタイルを使って描かれた幾何学的な装飾は，オリエントの雰囲気を伝える．[iii)]」

また，中村與資平展実行委員会編集『ドームをぬける蒼い風』には以下の解説がなされている．「外観は『ロマネスク様式』と思われ，二つのドームはモザイクを貼り，『ビザンチン風』ともいえる．（中略）エントランスのしっくい天井，階段室の曲線の手摺，ステンドグラス，そしてドーム廻りの鷲の飾りが見事である．[iv)]」

一方これらの解説とは別の観点で，スパニッシュ様式の建物の一群に豊橋市公会堂を位置づける例も見られる．藤森照信著『日本の近代建築(下)』には日本の近代建築に対する米国の影響を解説するなかで，ス

i） 西澤泰彦 「建築家中村與資平の経歴と建築活動について」『日本建築学会計画系論文報告集』No450，1993年8月，151–160頁．
ii） 山口廣＋日本大学山口研究室 『近代建築再見（上巻）』 建築知識，1997年，224頁
iii） 東海近代遺産研究会編著 『近代を歩く』 ひくまの出版，1994年，112頁．
iv） 中村與資平展実行委員会編集 『ドームをぬける蒼い風』 中村與資平展実行委員会発行，1989年，24頁．

パニッシュに触れ，住宅が主であったスパニッシュ様式の建築のなかで，特に公共建築の例として中村與資平による豊橋市公会堂と静岡市役所を挙げている．[v)]

以上見てきたように，豊橋市公会堂の意匠はロマネスク様式を基本とし，細部においてビザンチン様式やセセッションといった他の様式の影響も見られるという見方と，スパニッシュ様式と見る見方があることがわかる．

3. San Antonio Municipal Auditoriumについて

米国テキサス州サンアントニオに建つSan Antonio Municipal Auditorium（写真2）は，豊橋市公会堂と，メインエントランス廻りの意匠において共通する点が多い．これらの建物の間には，何らかの影響関係があるのではないかと推察された．

Jay C. Henry著*Architecture in Texas: 1895–1945*によれば[iv)]，San Antonio Municipal Auditoriumは1926年にAtlee B. Ayres，Robert M. Ayres，George Willis，E. T. Jacksonによる設計で竣工した．また，この建物は，当時米国南部で流行したスパニッシュ・コロニアルリバイバル（Spanish Colonial Revival）と呼ばれる様式であるとされている．

前掲*Architecture in Texas* 169–193頁には“THE SPANISH COLONIAL REVIVAL”と題された節があり，San Antonio Municipal Auditoriumはこの中で紹介されている．設計者として筆頭に記載されているAtlee B. Ayresはテキサス州において活躍した建築家で，1910年代にはF. L. Wrightの影響を受けたプレイリースタイルの建築を設計し，1920年代にスパニッシュ・コロニアルリバイバルの建築を設計するようになった．著書に*Mexican architecture : domestic civil & ecclesiastical*.[vii)] がある．

San Antonio Municipal Auditoriumはテキサス州におけるスパニッシュ・コロニアルリバイバルによる最も大きな公会堂のひとつであるとされており，現在でも歴史的な建築として市民に親しまれている．

4. 豊橋市公会堂とSan Antonio Municipal Auditoriumとの意匠の比較

豊橋市公会堂とSan Antonio Municipal Auditoriumを比較してみると，平面計画では顕著な類似性は見られない．また，規模も大きく異なる(図1)．しかしながら，メインエントランスの構成やドームを戴く塔の意匠については類似性が著しい．具体的には以下の類似性が挙げられる．

①ドームを載せた二本の塔が連続アーチを挟み込むエントランスの構成
②上記の連続アーチが5スパンである点
③ドームの幾何学模様
④塔のドーム直下部分の平面形状が八角形となって正方形の平面形状を持つ塔に貫入していること
⑤塔の上部で正方形の平面形状のコーナー

v） 藤森照信 『日本の近代建築（下）』 岩波書店＜岩波新書＞，1993年，72頁．
vi） Jay C. Henry, *Architecture in Texas: 1895–1945*, Austin: University of Texas Press, 1993, p. 173.
vii） Atlee B. Ayres, *Mexican architecture: domestic civil & ecclesiastical / photo. & text by Atlee B. Ayres*, New York: William Helburn Inc., 1926.

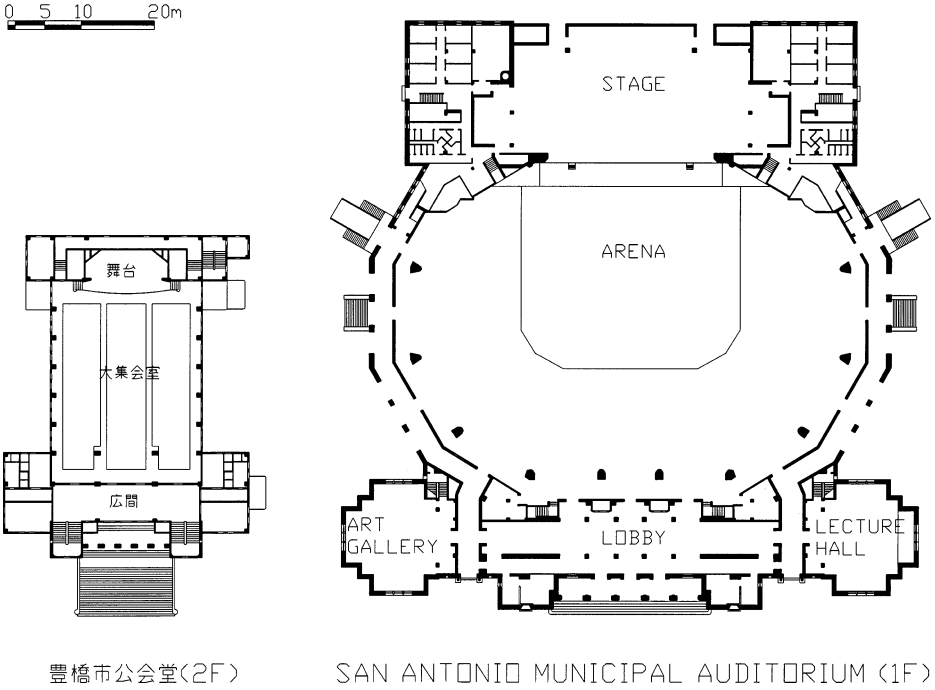

図１　豊橋市公会堂と San Antonio Municipal Auditorium の平面図の比較（同一縮尺）

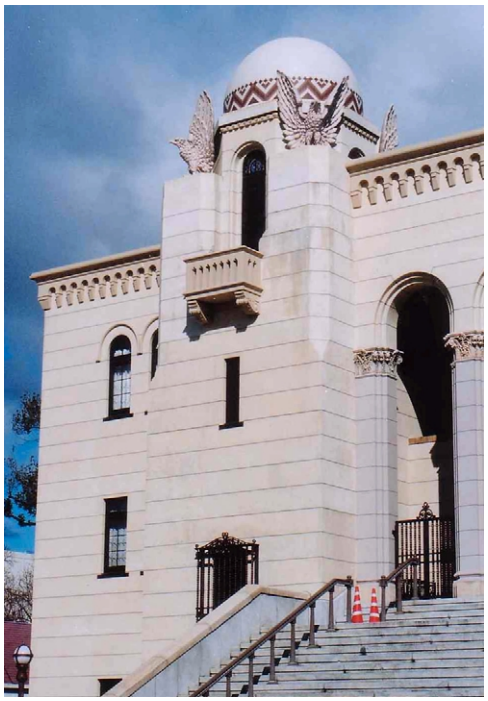

写真３：豊橋市公会堂の塔

写真４：San Antonio Municipal Auditorium の塔

に大きな面が取られており，アーチ型の開口部側にも同様の面が取られている点
⑥ドームを戴く塔には三層の開口部があり，最下部に鉄格子が付き[viii]，二層目の窓は縦に長い長方形をしており，三層目の開口はアーチ型でバルコニーが付く点
⑦外壁上部に連続する小アーチ型の持ち送り[ix]を持つこと

San Antonio Municipal Auditoriumにあって豊橋市公会堂にはない要素としては，以下のものが挙げられる．
①正面玄関左右に配された低いドーム（ART GALLERY及びLECTURE HALLの部分の屋根）
②スペイン瓦の屋根

一方，豊橋公会堂独自の要素としては，以下のものが挙げられる．
①エントランスの大階段
②ドーム四方に配された鷲の彫刻

また，豊橋市公会堂はSan Antonio Municipal Auditoriumに比べエントランス部分のファサードが縦長になっている．

5. スパニッシュ・コロニアルリバイバルについて

米国においては，1920年代はモダンデザインの影響を受ける前の様々な折衷主義の時代と位置づけられる．

前掲*Architecture in Texas*において，Henryは20世紀初期の折衷主義的建築について，大まかにACADEMIC ECLECTICISMとREGIONAL ECLECTICISMに分類している．

前者はアメリカンボザール流の様式建築であり，後者は地域性の強く反映された様式である．スパニッシュ・コロニアルリバイバルはREGIONAL ECLECTICISMの中に位置づけられており，以下の解説がある．「この新様式は，スパニッシュ・バロックリバイバルと呼ぶべきかも知れない．しかしながら，これらの建物の設計者達は，参照するモデルを選択するにあたって，あまり厳密ではなかった．プラテレスクとバロックの装飾が共に用いられており，さらにプラテレスクはしばしばイスラム風や後期ゴシック風のディテールと混合されている．あまりフォーマルでない種類の建物の場合には，地中海やアンダルシア地方等の地域的な建築の要素も用いられた．したがってスパニッシュ・コロニアルリバイバルという一般的な名前が適切であると思われる．」[x]

また，スパニッシュ・コロニアルリバイバルとミッションリバイバルの違いは様式上の違い及び時代の違いで区分されている．様式上の区別として，スパニッシュ・コロニアルリバイバルはミッションリバイバルよりも，「デザインソースについてより洗練され，正確な用い方ではないにせよ知識は増してはいる」[xi]とされている．また，時代上の区分としては概ね第一次世界大戦以前をミッションリバイバル，以後をスパニッシュ・コロニア

viii）窓にこのような鉄格子を設けることは，スパニッシュ・コロニアルの特徴のひとつである
ix）これは「ロンバルディアバンド」（前掲『近代を歩く』）「出し矢狭間風の装飾（前掲『近代建築再見（上巻）』）と呼ばれている部分を示す。
x）Jay C. Henry，前掲書，p. 170.
xi）同上

ルリバイバルと区分している．

また，山形政昭著『ヴォーリズの住宅』[xii] において，20世紀初頭のミッションスタイルとスパニッシュ・コロニアルリバイバルについて，以下の解説がなされている．「ミッションスタイルのデザインは左右対称の外観を基本にし，開口部の半円アーチと屋根の中央に立つ曲線状の妻壁が特徴で，装飾的なスパニッシュの通例のイメージよりも静かで割合に簡素な表現をとるものだ．」[xiii]「様式建築のなかでデザインの自由さが特徴ともいえるスパニッシュは，先のミッションスタイルと比較すると，より特色が見えてくる．左右対称性の有無，単純な半円アーチが主なデザイン要素であるミッション式に対して，スパニッシュの外観デザインは多様で饒舌だ．ミッションスタイルがカリフォルニアミッションの教会堂を原型にした一つの規範を有していたのに対して，スパニッシュにはプラテレスク式やチュリゲレスク式といったスペインの歴史様式，さらにはプエブロ式などカリフォルニアのローカルな手法が混入されることがあるという．ミッションスタイルのリバイバルにやや遅れて盛んになるスパニッシュの流行は，スパニッシュ・コロニアルリバイバルと呼ばれ，1925年前後にカリフォルニアの各都市で盛んに行なわれたものだ．」[xiv]

スパニッシュ・コロニアルリバイバルはリバイバルとされることから当然ながらその原型はスパニッシュ・コロニアルスタイルにある．

Rexford Newcomb は著書 *Spanish-Colonial Architecture in the United States* において，スパニッシュ・コロニアルスタイルはプラテレスクやチュリゲレスクの影響があるとするとともに，スペインの建築に影響を与えたムーア人（イスラム）の建築の影響についてもその影響を見ることができると指摘している．[xv]

イスラム建築にはしばしば幾何学模様で装飾されたドームがあり，豊橋市公会堂のドームの装飾に幾何学模様が見られるのも，スパニッシュ・コロニアルリバイバルという観点でみると自然な組み合わせであることが理解できる．

アメリカにおいてスパニッシュ・コロニアルリバイバルを用いたこの時代の代表的な建築家としては，カリフォルニア州サンディエゴで開催された Panama-California Exposition（1915～16年）の会場設計をおこなった Bertram Grosvenor Goodhueの名が挙げられよう．Goodhueには，その死の翌年である 1925 年に A.I.A ゴールドメダルが授与されている．歴代のA.I.Aゴールドメダル受賞者について紹介した Richard Guy Wilson 著 *The AIA Gold Medal*.[xvi] において，Goodhue は Panama-California Exposition でスペイン風の建築を設計したとして紹介され，この博覧会が1920年代のカリフォルニアにおけるスパニッシュ・コロニアルリバイバルのきっかけとなったとしている．

---

xii） 山形政昭 『ヴォーリズの住宅』 住まいの図書館出版局，1988年.
xiii） 山形，前掲書，105頁.
xiv） 山形，前掲書，109–110頁.
xv） Rexford Newcomb, *Spanish-Colonial Architecture in the United States*, New York: Dover Publications, inc., 1990. pp. 22–24.
xvi） Richard Guy Wilson, *The AIA Gold Medal*, New York: McGraw-Hill, 1984, pp154f.

Goodhueは，様々な様式を自在に扱う建築家であったが，スパニッシュ・コロニアルリバイバルの作品としては同博覧会におけるCalifornia Buildingが挙げられる．

また，Panama-California Exposition開催当時にその概要をまとめた書籍としてEugen Neuhaus著*The San Diego Garden Fair*[xvii]がある．Neuhausは，この博覧会の建築様式について，装飾的要素の少ないミッションスタイルに代えて，カリフォルニアにおける歴史的な意義を持つばかりでなく，気候に最もよく適合し，また博覧会の成功に必要な華やかさと色彩を持っていることを理由に挙げ，メキシコのスパニッシュコロニアル様式が採用されたと説明している．

日本におけるスパニッシュスタイルは，1922年頃より導入され，ウイリアム・M・ヴォーリズの活躍により流行したとされる．[xviii] ヴォーリズは米国カンサス州出身で英語教師として来日した後，キリスト教団近江ミッションを設立し，建築設計は独学である．豊橋市公会堂の竣工以前に完成しているヴォーリズ設計によるスパニッシュスタイルの建築として，関西学院大学旧図書館，同旧総務館，同経済学部棟（1929年竣工・兵庫県），駒井邸（1927年竣工・京都市）東華菜館（1926年竣工・京都市）などが挙げられる．なお，東華菜館には，幾何学模様で装飾されたドームが載せられている．

1章で述べたように，中村與資平は，スパニッシュスタイルの建築についても設計実績があり，1930年竣工の浜松銀行協会（写真5）や1934年竣工の静岡市庁舎本館（写真6）を挙げることができる．浜松銀行協会の竣工は豊橋市公会堂の設計期間と重なっており，豊橋市公会堂を設計する時点で中村與資平はすでにスパニッシュスタイルを取り入れていたことが検証できる．また，静岡市庁舎本館では豊橋市公会堂と同様に幾何学模様のタイルで装飾されたドームを用いている．

以上見てきたように，スパニッシュ・コロニアルリバイバルは，地域的かつ折衷的な様式であり，建築史上では傍流に位置づけられるが，当時の日本の建築に影響を与えていたことがわかる．

写真5：浜松銀行協会

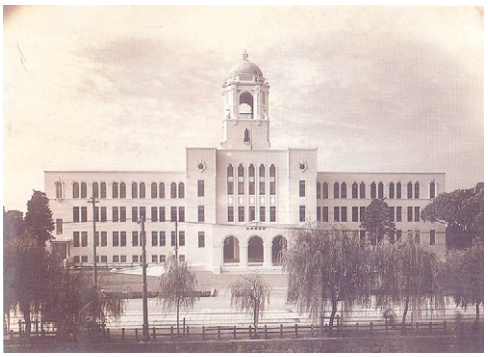

写真6：静岡市庁舎本館

xvii）Eugen Neuhaus, *The San Diego Garden Fair*, San Francisco: Paul Elder and Company Publishers, 1916, pp23f.

xviii）内田青蔵・大川三雄・藤谷陽悦編著 『図説・近代日本住宅史』 鹿島出版会，2001年，82頁.

6. San Antonio Municipal Auditorium と類似する意匠を持つ他の建築について

Jay C. Henry は，スパニッシュ・コロニアルリバイバルの建築の原型に関する説明の中で，スパニッシュバロックの教会について説明し，「二つの塔を持つスパニッシュバロックのファサードは，1920年代に多くのテキサス州内の都市に建てられた公共建築，特に公会堂に大きな影響を与えた.」[xix] と述べている.

そして，Henry は San Antonio Municipal Auditoriumに関する説明の中で，同じテキサス州ダラスに同時期に建設された State Fair Music Hall（1925年竣工[xx]）と非常に似ていたと解説している．State Fair Music Hallは，残念ながらその後大規模な改修を受け，建設当時の姿をとどめていない．しかし，Nancy Wiley 著 *The Great State Fair of Texas* の中にその正面を描いた挿絵が掲載されており（写真8）[xxi]，以下の類似性を指摘することができる.

①ドームを載せた二本の塔が連続アーチを挟み込むエントランスの構成
②上記の連続アーチが5スパンである
③ドームを載せた塔の最上部にアーチ状の開口部があり，そこにバルコニーがついていること
④スペイン瓦の屋根

また，前掲*Architecture in Texas*に紹介されているSweetwater City Hall and Municipal Auditorium[xxii]（1926年竣工，設計 Page Brothers）も前述のうち①②③の特徴を持つ（写真9）.

写真7：San Antonio Municipal Auditorium メインエントランス

写真8：State Fair Music Hall の挿絵

写真9：　Sweetwater City Hall and Municipal Auditorium

xix）Jay C. Henry，前掲書，p. 173
xx）Nancy Wiley, *The Great State Fair of Texas*, Dallas, Texas: Taylor Publishing Company, 1985, p. 95.
xxi）Nancy Wiley，前掲書，p. 128.
xxii）Jay C. Henry，前掲書，p. 174.

さらに前述のPanama California International Expositionにおける展示館のひとつであるSouthern California Counties Building（写真10）についても以下の共通性を見出すことができる．

①ドームを載せた二本の塔が連続アーチを挟み込むファサードの構成

②ドームを載せた塔の最上部にアーチ状の開口部があり，そこにバルコニーがついていること

③ドームに幾何学模様の装飾がなされていること

Eugen Neuhausは，この建物について，「タイルで被われた華美な双塔がこの建物の主な特徴である」と説明している[xxiii]．なお，

残念ながらこの建物は1925年に火災により焼失している．[xxiv]

写真10：Southern California Counties Building

7. 豊橋市公会堂の設計に対するスパニッシュ・コロニアルリバイバルの影響についての考察

以上見てきたように，豊橋市公会堂の意匠上の特徴は，米国におけるスパニッシュ・コロニアルリバイバルとされるいくつかの建物の特徴と類似していることが指摘できる．そのなかでもSan Antonio Municipal Auditoriumとのエントランス廻りの類似性が著しい．San Antonio Municipal Auditoriumの竣工が1926年であり，豊橋市公会堂の竣工が1931年であることから，その設計に際して前者の影響を受けている可能性は否定できない．

雑誌による情報入手の可能性を検証するために，当時日本において入手可能であった米国の建築雑誌を調査した．その結果，*The Architectural Forum*誌1927年9月号に“The Designing of Auditoriums”[xxv]と題された記事が掲載されており，そのなかでSan Antonio Municipal Auditoriumの塔部分の写真が掲載されていた．また，記事とは別に図版として1階平面図，2階平面図，全体外観およびオーディトリウムの内部の写真が掲載されていた[xxvi]．

この記事は，公会堂一般について，機能的な面に重点をおいて解説してある．外観については，装飾の少ない古典様式やイタリアンルネッサンスが好ましいとの記述があるが，スパニッシュ・コロニアルリバイバルについては記述がない．

また，日本で発行されていた雑誌『日本建築士』の1927年11月号に「摘録【22】公會堂の設計に就て」と題した記事があり[xxvii]，前述の*The Architectural Forum*誌

xxiii）Eugen Neuhaus，前掲書，p. 55.

xxiv）The San Diego Historical Societyのウェブサイトよるhttp://sandiegohistory.org/timeline/timeline2.htm

xxv）R. H. Hunt, “The Designing of Auditoriums.” *The Architectural Forum* New York: Rogers & Manson, Sep (1927): 193–204.（なお，この雑誌は東京大学工学部建築学専攻図書館に1927年より定期的に入荷されていたことが確認されている．）

xxvi）前掲 *The Architectural Forum* Sep (1927): 218–219.

xxvii）「摘録【22】公會堂の設計に就て」『日本建築士』 1927年11月号，15–18頁.

の記事についての概略が紹介されている．しかしながら，『日本建築士』の記事の中にはSan Antonio Municipal Auditoriumの図版は含まれていない．

豊橋市公会堂の設計図には昭和5年（1930年）4月19日という日付がある．したがって，豊橋市公会堂の設計にあたって，San Antonio Municipal Auditoriumが掲載されている *The Architectural Forum* 誌を参考にすることは可能であったことが検証できる．

仮に設計者がSan Antonio Municipal Auditoriumを参考にしたとしても，ただちに豊橋市公会堂の建築様式がスパニッシュとされる訳ではない．1章で見てきたように，ロマネスク様式を基本とし，細部においてビザンチン様式やセセッションといった他の様式の影響も見られるという見方と，スパニッシュ様式と見る見方がある．

豊橋市公会堂がロマネスク様式であると説明されてきた理由については，以下の理由が考えられる．

1）スペイン瓦，スタッコ壁という典型的なスパニッシュスタイルの要素を欠いているため，一見したところスパニッシュスタイルとはみなし難い．
2）外壁上部の連続する小アーチ型の持ち送りや外壁に開けられた小さなアーチ窓の扱いはまさしくロマネスク様式の特徴である．

また，豊橋市公会堂の意匠的特徴のうち，スパニッシュ的な要素としては，以下のものが挙げられる．

1）モザイクタイルで幾何学模様をつけたドーム
2）塔の1階部分の窓に付く鉄格子

日本の都市でSan Antonio Municipal Auditoriumと類似の外観デザインを実現しようとした場合，デザインの背後にある歴史的な文脈は，テキサスとは全く異なる．スペインとは歴史的なつながりを持たない日本の都市で，スペイン的な要素を受け継ぐ必然性はない．そこで設計者は，ドームを載せた二本の塔が連続アーチを挟み込むエントランスの構成を取り入れる一方，より質素で威厳ある表現とするためにスペイン瓦を採用せず，ロマネスク風のデザインで外壁をまとめたのではないかと推察する．

一方，豊橋市公会堂の意匠について，ドームと塔の形状からセセッション様式の影響との見方もあるが，塔の形状についてはスパニッシュ・コロニアルリバイバルの影響とみるのが妥当だと考える．

写真11：セセッション館

また，豊橋市公会堂の独自性という観点では，エントランスの大階段が挙げられる．大階段は，当時のメインストリートであり，豊橋市公会堂の敷地に対して真正面に向かっている大手通に対してのアイストップの効果を高め，建物の記念性を高める点で，大きな効果がある（図2）．

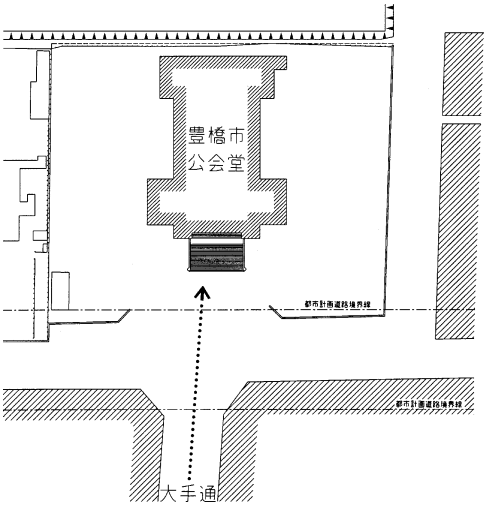

図2：豊橋公会堂敷地と大手通（竣工当時）

8. まとめ

以上，豊橋市公会堂の意匠についてのスパニッシュ・コロニアルリバイバル様式との類似性及び設計者が受けた影響の可能性について論じてきたが，結論としては以下のようにまとめることができる．

1）豊橋市公会堂の意匠と類似する建築が，米国における1910年代から20年代にかけてのスパニッシュ・コロニアルリバイバルと呼ばれる様式の建築のなかに複数存在し，なかでもSan Antonio Municipal Auditoriumとのエントランス廻りの類似性が著しい．

2）豊橋市公会堂の設計者がSan Antonio Municipal Auditoriumを参考としたか否かは直接的には検証できない．しかし，豊橋市公会堂が建設されるより以前の1927年に日本で入手可能であったアメリカの建築雑誌*The Architectural Forum*の中にSan Antonio Municipal Auditoriumの図版が“The Designing of Auditoriums”と題する記事とともに掲載されている．また，この記事の存在は同時期の日本の雑誌『日本建築士』にも「公會堂の設計に就て」と題する記事のなかで紹介されている．

3）豊橋市公会堂は，スパニッシュ・コロニアルリバイバルの特徴とされる要素を持つが，建物全体としてはロマネスク様式と見なされる場合が多い．これは，設計者がSan Antonio Municipal Auditoriumを参考としつつも，より質素で威厳ある表現とするため，ロマネスク風のデザインを採用したものと推察される．

4）豊橋市公会堂の独自性は，大集会室を2階レベルに設け，エントランスに大階段を設けたことにある．このことにより，当時のメインストリートである大手通に対するアイストップの効果を高め，より記念性の高いデザインとなっている．

9. 謝辞

本稿執筆のきっかけとなったのは，豊橋創造大学の加藤知佳子助教授より，学会（6th Annual Meeting of the Organization for Human Brain Mapping）の会場となったSan Antonio Municipal Auditoriumの写真を提供していただいたことだった．また，名古屋大学の西澤泰彦助教授より，豊橋市公会堂ならびに中村與資平に関する資料を提供していただき，併せて資料収集にあたりアドバイスをいただいた．また，スパニッシュスタイルに関する助言を東京大学生産技術研究所・博士研究員丸山雅子氏よりいただいた．豊橋市文化市民部文化課には豊橋市公会堂の設計図の複写でお世話になった．ともに心より謝意を表します．

参考文献

1） 西澤泰彦 「建築家中村與資平の経歴と建築活動について」『日本建築学会計画系論文報告集』No450, 1993年8月, 151–160頁.
2） 山口廣＋日本大学山口研究室 『近代建築再見（上巻）』 建築知識, 1997年.
3） 東海近代遺産研究会編著 『近代を歩く』 ひくまの出版, 1994年.
4） 中村與資平展実行委員会編集 『ドームをぬける蒼い風』 中村與資平展実行委員会発行, 1989年.
5） 藤森照信 『日本の近代建築（下）』 岩波書店＜岩波新書＞, 1993年.
6） 山形政昭 『ヴォーリズの住宅』 住まいの図書館出版局, 1988年.
7） 山形政昭 『ヴォーリズの建築』 創元社, 1989年.
8） 内田青蔵・大川三雄・藤谷陽悦編著 『図説・近代日本住宅史』 鹿島出版会, 2001年.
9） Jay C. Henry, *Architecture in Texas 1895–1945*, Austin: University of Texas Press, 1993.
10） Rexford Newcomb, *Spanish-Colonial Architecture in the United States*, New York: Dover Publications, inc., 1990.
11） Richard Guy Wilson, *The AIA Gold Medal*. New York: McGraw-Hill, 1984.
12） Eugen Neuhaus, *The San Diego Garden Fair*, San Francisco: Paul Elder and Company Publishers, 1916.
13） Nancy Wiley, *The Great State Fair of Texas*, Dallas, Texas: Taylor Publishing Company, 1985.

ウェブサイト

1） The San Diego Historical Society, http://www.sandiegohistory.org/index.html

写真出典：

写真1：筆者撮影
写真2：B. Dunphy Co. Photography
写真3：筆者撮影
写真4：B. Dunphy Co. Photography（筆者によるトリミング加工）
写真5：写真家　宮本和義氏撮影
写真6：INAX提供（静岡県建築士会）
写真7：B. Dunphy Co. Photography
写真8：Nancy Wiley, *The Great State Fair of Texas*, Dallas, Texas: Taylor Publishing Company, 1985, p. 128.
写真9：前掲*Architecture in Texas 1895–1945*, p174.
写真10：San Diego Historical society Research Archives Photograph Collection
写真11：筆者撮影

図版出典：

図1：豊橋市公会堂設計図および *The Architectural Forum* Sep (1927): p. 218. の図版を基に筆者が作図
図2：豊橋市公会堂設計図を基に筆者が作図